エッタールで考えられたとされている。

カトリック神学は、究極以前のもの（すなわち自然や文化）を、究極のもの（超自然）の光の下で取り扱う。そして究極のものが究極以前のものを全うすると考える。しかしプロテスタント神学は、信仰によって義とされることのみを余りに強調するため、その結果として究極のもの（恩寵）がしばしば究極以前のものを無意味なもの、あるいは罪に満ちたものとして拒否して来た。

それに対しボンヘッファーは、全く独自な倫理的理論で接近し、究極のものは究極以前のものを支え、保護するものであると理解する。それは彼によれば、新約聖書や受難と復活の福音が、われわれを旧約聖書やこの地上における生へと送り帰すようなものなのである。義認という最後の究極の言葉は、信じる者をこの世から逃避させるのではなく、自然の生活や文化の営みといった究極以前のものへと向かわしめるのである。なぜなら、恵みの神は、世界の周辺においてではなく、世界の真中でわれわれが神に出会うことを、命じておられるからである。

「キリスト教的生活は、究極以前のものの破壊でも、聖化でもない。そしてキリストにおいて神の現実がこの世界の現実に出会い、われわれはこの現実の出会いにあずかることが許されるのである。それはすべてのラディカリズムと妥協主義とを越えた出会いである。キリスト教的生活は、キリストとこの世界との出会いに与かることである[15]」。

プロテスタンティズムにとって、究極のものは、常に敬虔な誘惑であった究極以前のものを破壊しないし、カトリシズムにとって、常に自然な誘惑であった究極のものが、究極以前のものの後に従うといったことでもないのである。かくして究極のものは究極以前のものに先行し、方向を指示するのである。究極のものは、世界の片隅で見出されるのではなくその中心において、究極以前のものを構成する道として見出されるのである。

福音に基づいて自然への注目を復活させる必要性のあることを主張して、ボンヘッファーが述べる次の言葉は充分に注意されねばならないであろう。

「したがって、自然の概念は福音に基づいて再び回復されねばならない。われわれは堕罪という事実を考えようとすれば、造られたものとは区別された自然的なものについて語り、また造られたものについて考えようとすれば、罪あるものとは区別された自然的なものについて語ることになる。自然的なものは、堕落以後、イエス・キリストの到来に向けられたものである。不自然なものは、堕落以後、キリストの到来に対して自らを閉ざしているものである。キリストに向けられたものと、キリストに対して自らを閉ざしているものとの相違は相対的なものにすぎない。というのは、自然的なものがキリストの到来を強要することはなく、不自然なものがキリストの到来を不可能にすることもない。そして両者の場合において、キリストが現実に来たりたもうことは一つの恵みの出来事であり、キリストの到来によって初めて、自然的なものは、その究極以前のものとして性格を確保され、不自然なものは、究極以前のものを破壊するものとしての性格を決定的にあらわにされる。そしてキリストの前においても、自然的なものと不自然なものとの間の区別は存続しており、それを解消することは、必ず重大な損失を伴うのである[16]」。

五、ボンヘッファーの『倫理学』の現代的意味について

ボンヘッファーにとっては、「キリストは、今日のわれわれにとって、誰であるのか」という問いが生涯を貫くテーマであった。倫理研究において彼は、「キリストとは誰か」という最初の問いから、「キリストはいかにして、今は、ここで、われわれの間に形をとりたもうか」という問いへと移行して行ったと思われる。しかしながら、この移行を行なうことによって彼は、「キリストとは誰であるか」という最初の問いの持つ重要性をいささかも制限しようとはしていないのである。ボンヘッファーが、われわれの間でキリストが「いかに」という問いを取り上げる時、彼はイエス・キ

15) Ibid., S. 141.
16) Ibid., S. 153-154.